

中公文庫

私の彼は腐ってる 2

九条 菜月

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一話 初夏の雪女

7

第二話 小さなモノノケたちのお引越

131

第三話 狸の嫁入り

185

私の彼は腐ってる2

第一話 初夏の雪女

緩やかな起伏が続く登山道。五月初旬ということもあって、頬を撫でる風はすっきりと心地よかった。天気は一日を通して快晴。暑くもなく、寒くもない、絶好の登山日和といえよう。

その登山道を白の登山用ザックを背負いながら、藤岡揚羽は黙々と歩いていった。服装は黒のフリースに黄色のレインウェアを羽織り、ボトムスはグレイのタイツに黒のトレッキングスカート。それに登山専用のトレッキングシューズを履き、日差し避けのベージュの帽子を被っている。

身長が低いいため、どうしても初登山に挑む中学生のようにしか見えないのが難点だ。登山部のメンバーに交じっても、兄弟について来た妹感が強くて複雑な気持ちになる。童顔に加え、化粧つ気がないというのもそれに拍車をかけているだろう。髪をのばせば少しくらいうえに見られるのでは、と思っても、ついつい中途半端な長さに耐えきれず、いつものショートボブに戻ってしまう。



前方には揚羽が所属する尾生鳩おおばと大学登山部のメンバーが数名、一列になって進んでいた。登山道をのぼりはじめて、はや二時間。時折、こちらを氣遣きづかうように声をかけられるが、揚羽は返事をするだけで精一杯だ。メンバーは二年生が揚羽一人で、そのほかは三年と四年生があわせて八人。ほかにも部員はいるが、都合がつかずに欠席した者もいる。

揚羽が登山部に入部したのは、去年の十月頃。知りあいの先輩せんぱいから、「部活やサークルに入っておいたほうが、就職しゅうしよくの際のアピールになる」と聞いたのがきっかけだった。中途半端な時期の入部だが、一学期は授業に追われ、そこまでの余裕よゆうがなかったことが大きい。友人たちも部活やサークルに入っていない人のほうが多かったので、揚羽もそこまで重要視していなかった。

もともと体を動かすことが好きな揚羽が、熟考じゅうこうの末に選んだのが登山部であった。そのときにはすでに大半の山が閉山していたこともあり、本格的な活動は翌年に持ち越された。そのため登山に参加するのは、これがはじめてのことだった。

初登山に選ばれたのは、地元からバスで二時間ほどの場所に位置する、比較的初心者向けの山である。近隣の小学校でもよく学校登山で利用しているらしい。それを聞いて小学生がのぼれるような山だったら楽勝だ、と軽く考えていた過去の自分を叱しかりたい。

山頂まで片道三時間と聞いていたが、そのゴールは一向に見えてくる気配はなかった。

それほど急勾配きゅうがいでもないのに自然と息があがり、登山リュックが肩や背中に重くのしかかる。体力には自信があつたのだが、これからは毎日、ランニングなどの運動を取り入れるべきなのかもしれない。

「はあ……」

小さな溜息ためいきを一つ。もっと体力がつけば周囲の景色けしきも楽しめるようになるのだろうか、いまは集団から遅れないようにについて行くだけで精一杯だ。

「藤岡さん、大丈夫？ ちょっと休もうか？」

「だ、大丈夫です！」

今日の登山は日帰りということもあって、スケジュールもだいぶ詰まっている。予定にない休憩きゅうけいは避けるべきだろう。先頭のほうから聞こえてきた声に、揚羽は精一杯、声を張りあげて応えた。本音は五分でもいいから、立ち止まって休憩したいところだが。「水分の補給は忘れないようにね！」

「……はい」

のどが渴いていなくても、定期的に水分を取るようにと口が酸すっぱくなるほど注意されている。外気温が低いと汗をかきにくいため、つい水分の補給が疎おろそかになってしまいうらしい。自分でも気づかないうちに脱水症、もしくは熱中症になっていた、なんてこともあるそうだ。

せっかく指摘しってきを受けたのだから忘れないうちに、と揚羽は腰にさげていたドリンクホルダーから水筒を取った。立ち止まって蓋ふたを開け、ほどよく冷えたスポーツドリンクを飲む。

「あー、生き返る……」

自動販売機は出発地点である山の麓ふもとにしかないため、二口ほど飲んだらそれでお終しまいだ。水分の補給も大切だが、下山時のぶんも残しておかなければならない。むしろ、これから気温があがることを考えれば、可能なかぎり水分は残しておくべきだろう。

ふと視線を横よこに向ければ、途切れた木々のあいだから美しい溪谷けいこくが見えた。新緑の季節ということもあって、どの木も色鮮やかな緑を湛たえている。そのあいだを蛇行だこうするように川が流れ、時折、岩壁がんべきに当たって白い飛沫しぶきがあがるのが見えた。その清涼感せいりょうかん溢あふれる景色に、重くのしかかっていた疲労感ひろうかんが軽減されたような気がする。

山頂まであと少しだ、と揚羽は自分を励はげまし、隊列に戻るべく前方を見た。

「――あれ？」

誰だれもない。

山道は続いているのだが、そこに登山部の仲間たちの姿はなかった。集団から遅れてはいたが、それほど距離は開いていなかったのに。

「まずい、急いそがなきゃ」

仲間たちに迷惑をかけたくないからと、しんがりに立候補したのは揚羽自身だ。姿が見えないことに気づかれるまえに合流しなくては。幸い一本道なのでスピードをあげてのぼっていけば、すぐに追いつけるだろう。

しかし、その考えは数分後、脆くも崩れ去ることになる。

「どっちに行けばいいんだろ……」

揚羽のまえには、左右にわかれた登山道があった。今回は今年初めての登山ということで、初心者コースを行くとは聞かされていた。しかし、左右の道のどちらが初心者コースなのか、判断がつかない。もっと詳しく話を聞いておくんだった、と揚羽は肩を落とした。こういうときに限って、下山してくる登山者もない。

「勘で行くか、誰かが戻ってきてくれるのを待つか……」

揚羽がいないとわかれば、誰かが捜しに来てくれるだろうことはわかっていた。しかし、それではあまりにももうしわけない。揚羽は腕組みし、左右の道を見比べた。右側の登山道のほうが緩やかそうに見えるので、行くとすればそちらだ。

「——どうかしたの？」

よし行くぞ、と足を踏みだしたときである。背後から声をかけられ、揚羽は振り向いた。

そこに立っていたのは、二十代半ばに見える女性であった。長い髪をうしろで一つに

まとめ、服装はネイビーのベストにチェック柄のシャツとベージュのボトムスといった、シンプルなでたちだ。荷物は大きめの登山用ザックと、腰にさげたドリंकホルダーのみ。ベージュの帽子を深めに被り眼鏡もかけているため目元はよく見えないが、代わりに口元にある二つのホクロが印象的な女性だった。身長は百五十二センチの揚羽よりも高く、百六十センチ以上はあるだろう。

「あなた一人？ お父さんかお母さんは？」

「えっと、親じゃなくて、一緒に来た登山部の先輩たちを見失ってしまったんです。追いつこうと思ったんですけど、右か左で迷っちゃって……」

「先輩さんたちはなにか言っていなかった？」

「今日は初心者コースを歩くって」

「じゃあ、左ね。右側は平坦へいたんそうに見えるけど、五分くらいで急なほり坂になってるから、上級者向けになるの。間違いやすいんだよね」

女性の説明に、揚羽は勘で進まなくてよかった、と心の底から安堵あんどした。下手へたをすれば揚羽の不在ふざいに気づき、捜しに戻って来てくれるかもしれない登山部仲間とすれ違いになるところだった。

「一応、看板はあるんだけど、この時期は草が生い茂おしげるから見づらくて」

そこ、と指差された場所を見れば、腰の高さまである草むらのなかに、木の板で作ら

れた案内板が設置せっちされていた。

「先輩さんたちと合流できるまで、一緒に行きましょう。初心者コースは山頂まで一本道だけど、迷うこともあるから」

「え、でも……」

ありがたいもうしでだったが、揚羽はそれをそのまま受け取ることはできなかった。

登山慣れした様子から考えると、この女性は上級者コースをのぼる予定だったのかもしれない。自分のためにコースを変えさせるのは、さすがに気が引ける。しかし、そんな揚羽の葛藤かつとうに気づいた女性が、くすりと笑った。

「気にしないで。この山は何度ものぼってるから、その日の気分でコースを変えることはよくあるの。みんなが心配してるかもしれないから急ぎましょう」

「あ、ありがとうございます！」

女性の斜めうしろにつく形で揚羽はふたたび歩きだした。時折、揚羽がちゃんとついてきているかどうか、振り返るように確認してくる。

「ここの登山道は整地しやうちされてるわけじゃないから、デコボコして歩きにくくてね。慣れないと余計に体力を消耗しょうもうしちゃうんだ。体力に自信がある人だって、山に慣れていないと辛いつらと思うよ」

「コツとかあるんですか？」

「こればかりは回数をこなしていくしかないよ。トレッキングポールっていう、スキーのストックみたいなものがわりとオススメかな。両手に持って、杖つえみたいにして歩くやつ。重心が分散されるから、体力の温存にもなるし。ただ、バスや電車に乗るときに、荷物になるから嫌いやって人も多いんだけど」

「でも、楽になるんなら、使ってみたいです」

「あとは、荷物がちよっと多いのかも。今回、使わなかったものは次は置いてきてもいいんじゃないかな」

実に耳に痛い言葉だ。事前に必要な持ち物の一覧をわたされていたが、予備のタオルなど、備えあれば憂うれいなしとばかりにあれこれ詰めすぎた自覚はある。今日の失敗を教訓に、次は気をつけよう。

「登山、お好きなんですね」

「まあ、仕事にするくらいだから。私、登山インストラクターをやつて、今日は気分転換てんかんにのほりにきたの」

だから詳しいのか、と揚羽は納得なっとくした。しかし、登山インストラクターと口で言うのは簡単かんたんだが、実際はかなり大変な仕事だろう。揚羽なんてまだ山頂についていないにもかかわらず、すでにギブアップしそうになっているが、女性は淡々としていた。

「——あ。もしかして、あれじゃないかな」

会話をしながら進んでいると、女性がそう言って前方を指差した。そこには男女数名の集団が、一ヶ所で立ち止まり会話をしているところだった。揚羽に気づいた一人が声をあげる。

「よかった！ いま、戻ろうかって話をしていたところなんだ」

「ごめんなさい。気づいたら、だいたい遅れちゃってて……」

「いいよ、いいよ。俺^{おれ}たちに普通^{ふつう}について来られてたから、大丈夫かと思っちゃって。こっちこそ、ごめんね」

三年の先輩が駆け寄^かってきたことを皮切りに、残りの面々も揚羽の周りに集まってきた。揚羽も気を遣^やつてむりをしていた自覚があるため、もっと素直^{すなお}に休憩したいともうしでていればよかったと反省する。

「じゃあ、藤岡さんにはもっとまえにきてもらって——」

そういえばあの人は、と揚羽が首を巡^{めぐ}らせると、すでにその姿は見当たらなかった。無事に合流できたことを見届け、さきに行ってしまったのかもしれない。結局、お礼を言いそびれてしまった。

——山頂に行けばまた会えるかも。

そのときは必ずお礼を言わなければ、と思った揚羽だったが、山頂についた頃にはもうそこには誰の姿もなかった。途中^{とちゅう}ですれ違^{ちが}わなかったから、上級者コースを下山し

たのかもしれない。

登山インストラクターと言っていたので、登山部での活動が続けていれば、またいつかどこかで会えるだろうか。そのときこそは忘れずにお礼を言わなければ、と揚羽は心に決めたのだった。

三時間まえにセットしておいたタイマーがキッチンに鳴り響く。ティーブルに教科書を広げレポートをまとめていた揚羽は、パツと顔をあげた。そして、椅子にかけておいた青と緑のチェックのエプロンを身につけると、ドキドキしながら冷蔵庫のドアを開ける。「うまく固まったかなー」

様々な食材が並ぶなか、揚羽はパウンドケーキを焼くときに使用する銀色の型を取り出した。なかには寒天で固められたゼリー状のものが詰まっている。軽く揺すり完全に固まっていることを確認。冷蔵庫のドアを閉め、揚羽はそれをまな板のうえに置いた。それをひっくり返して、底の部分を軽く叩く。型をそつと持ちあげると、ぷるんと音がたて中身がでた。

色はどす黒く、とてもではないが食欲をそそる見た目とは言い難い。

「……やっぱり、味見しなきゃダメかな」

材料は寒天と牛の血だ。そこに調味料とスパイスを少々。寒天が混ざりやすくするために、ブイヨンをお湯で溶いたものも加えてある。冷蔵庫に入れるまえに一度、味見をしておくべきだったが、見た目のインパクトから固まってからにしようと思つて後回しにしてしまったのだ。

「ちよつとだけ……」

端を少しだけ切つて、口に入れる。舌触りはやや固めのゼリーだ。味は悪くない。しかし、スパイスの香りのあとに、血液独特の鉄臭さがやつてきて揚羽は思わず顔を顰めた。マズくはないが、テーブルに並んでいても食べたい料理でもない、というのが正直な感想だ。

「よし、とりあえず食べてもらおう」

揚羽はゼリー状のものを皿に移し、ふたたび冷蔵庫に戻した。それから、二人分の取り皿とフォークをテーブルのうえにだしておく。よし、と気合いを入れてエプロンをつけたまま廊下にでた。

揚羽が世話になっている星野家の屋敷はとにかく広い。宿題をしていたキッチンとは別にダイニングルームや、あまりの広さと豪華さにいまいち落ちつかないリビングルーム。応接室、図書室もあった。

唯一の身寄りである祖父が亡くなつて、はや一年と半年。星野家にお世話になるよう

になって、あと数ヶ月ほどで一年を迎えることになるのだが、いまだにこの絢爛豪華な屋敷には慣れる気がしない。

「っていうか、土足^{どぞく}っていうのも理由の一つなんだよね……」

ネイビーのパーカに黄色のショートパンツ。それに黒のソックスと高校時代の運動靴を履いていた揚羽は、土足で室内を歩くことの違和感に溜息をついた。海外生活が長かった星野家の家主の意向だ。

リビングルームに顔をだした揚羽は、そこに日中は見かけることのない人物を目にして首を傾^{かし}げた。

「伊織^{いおり}さん。今日って診療所は休みだったけ？」

揚羽の声に反応して顔をあげたのは、ソファに座って新聞を読んでいた三十代前半の男性だった。

星野伊織。

この屋敷の持ち主であり、揚羽の後見人兼許嫁^{いいなずけ}だ。

自分に許嫁がいると知ったのは、十二歳のときだった。決めたのは祖父である。十歳以上も年上の男性と許嫁なんて、と普通は反発するところであるが、揚羽はわたされた写真を見て伊織に一目惚^{ひとめぼ}れしてしまった。むしろ許嫁がこんな子供でいいのかと、悩^{なや}んだくらいだ。

それから一度も会ったことはない。歳を重ねるにつれ、許嫁なんて本当にいるのだからかと懷疑になることもあったが、揚羽は一途に伊織を想い続けた。そして、去年の八月。フィンランドで暮らしていた伊織が揚羽と暮らすために日本に引越してきたことで、はじめて顔をあわせたのだった。

グレイのズボンに長袖のワイシャツというラフな格好の伊織は、新聞を畳みサイドテーブルに置いた。揚羽を視界に入れると、切れ長の目を細めはにかむように微笑む。はつきりとした目鼻立ちと肉感的な唇は、誰が見てもイケメンの部類に入るだろう。口元のホクロがさらに蠱惑的だ。身長もいまは座っていてわからないが、立ちあがると見あげなければならぬほどに高い。小柄な揚羽と並ぶと、まさに大人と子供だ。

「今日は土曜ですが、医療機器のメンテナンス日なのでお休みにしたんです」

「だったら声をかけてくれればいいのに」

「勉強に集中していたようなので。ところで、誰かお捜しでしたか？」

「あ、そうだった。リチャードさんと——」

言いかけたところで、揚羽の視線は伊織の左手付近に釘付けになった。

「……伊織さん。腕、ないんですけど」

ワイシャツの肘からさきの布部分が、だらんと所在なげに揺れていた。その指摘に伊織は困ったように笑い、

「培養がまにあわなくて。日本は湿気が多いと聞いていましたが、まさかここまで傷みが激しいとは思っていませんでした」

と、なんでもないことのように告げた。伊織の正体を知るまえだったら、揚羽は絶叫していたことだろう。

伊織の正体——それはゾンビだ。

この世のなかには、人間が知らないだけでモンスターや妖怪といった生き物たちが生息している。伊織のように人間社会に溶け込んで生活している者や、人里離れた山奥でひっそりと暮らしている者など、千差万別だが。

揚羽の祖父、藤岡重光は日本全国を回り、その土地に伝わる民話や伝承を研究する民俗学者だった。祖父はまるで彼らが実在するかのように語っていた。それがまさか、本当に知りあいだったとは。

せめて伊織の正体くらいは教えておいてほしかったとは思うが、いきなり実はおまへの許嫁はゾンビなんだ、と言われても信じることはできなかっただろう。実際に伊織と会ってから、説明すればいいと思っていたのかもしれない。そのまえに祖父は病気で亡くなってしまったのだが。

伊織の正体を知っても、揚羽の想いは変わらなかった。むしろ、一緒に暮らすようになって、より好きになったくらいである。ゾンビといっても、人間を襲うわけでもなく、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。